

孔雀の尾が長すぎて遠回り!?

江戸時代、全国の大名は原則1年交代で元と江戸を往復すること(参勤交代)が義務づけられていましたが、御三家筆頭の尾張藩も例外ではありませんでした。ここでは、この参勤交代で藩主が江戸へ出立する際に名古屋城内で生じた意外な仕事と、その任に当たった役人の一手間についてご紹介します。

尾張藩主は初代・義直以来、二之丸御殿を日常的な居所とし、ここで政務を行いました。藩主が参勤交代で名古屋城を留守にする際は、この二之丸御殿で藩主が暮らす空間とそれに付随する二之丸御庭は「封印」されました。つまり、ごく一部の役人以外は誰も入れない空間となったのです。当時、御殿の奥を管理し、藩主の衣装・調度の準備等を担った御小納戸という役職がありましたが、その職務日誌の一種である「尾州御留守日記」(徳川林政史研究所蔵)では、この「封印」の際に、二之丸御庭で飼われていた鳥たちを郭外へ移送していたことが記されています。

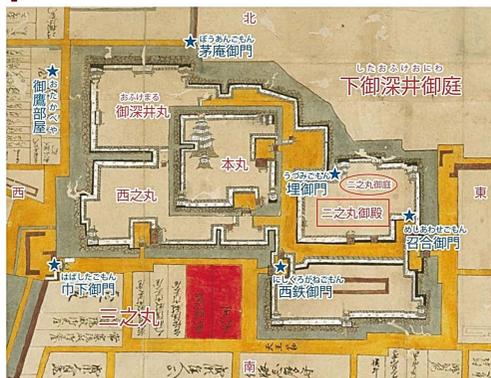
たとえば、明和3年(1766)3月、9代藩主・宗睦が江戸へ出立した際の記録では、二之丸御庭で飼われていた「孔雀一羽」・「鶴二番」・「四十から雁」が御鷹方(鷹の飼育や鷹狩などに携わる役所・役人)に預けられるため、二之丸から移送されたことが記されています(明和3年3月3日条)。藩主留守の間、御鷹方の役人がこれらの鳥の世話をしたと考えられます。具体的な預け場所は不詳ですが、御深井丸から外堀を挟んで西向いに位置した御鷹部屋か、あるいは下御深井御庭へ預けられたのだと思われます。

さて、このときの移送ルートですが、「鶴」と「四十から雁」は二之丸西北部にある埋御門から堀へ下るされ、(おそらくは舟で外堀を渡り)下御深井御庭の大手である茅庵御門前まで運送され、御鷹方の役人へ引き渡されました。ところが、「孔雀」に関しては「鶴」などと同じルートでは運ばませんでした。

た。このとき「孔雀」は尾が長すぎたため、従来用いていた通い籠では移送できず、9尺(約270cm)ほどの籠に入れることになり、その大きさのため埋御門を通れなかったからです。結局、「孔雀」は二之丸御殿の南東方の出入り口である召合御門を経て、二之丸西鉄御門から運び出されたことが記されています。つまり、西鉄御門を出て三之丸を西に向かって進み、巾下御門を通り西之丸の外堀を廻る形で御鷹部屋あるいは下御深井御庭へ移送されたのだと思われます。担当役人にしてみればそれが本務ですし、藩主の飼っていた鳥を扱うので、労力を厭わず移送するのは当然のことですが、埋御門から移送するルートに比べ遠回りすることになり、籠の調達のことも含めると、役人の苦労がうかがえます(※ただし、毎回このような遠回りの手間が生じていたわけではないようです)。

このように江戸時代の名古屋城では様々な仕事が行われ、それに伴うたくさんの楽しさや苦労があったと推測されます。みなさまに、より愛着を持って城内外を巡っていただくためにも、今後も文献史料の解説を通して、名古屋城に生きた人びとの営みをご紹介できればと思います。

(学芸員 今和泉大)



▲18世紀前半名古屋城周辺の様子
(「名古屋図」〈部分、一部加工〉名古屋市蓬左文庫蔵)



名古屋城 調査研究センターだより

第4号 2023 3

調査研究センターの裏方仕事

名古屋城調査研究センターの設立から4年が経過としてしています。この間、城内各地では本丸内堀、二之丸など重要な発掘調査が行われ、西の丸御蔵城宝館が誕生し企画展も開催されてきました。炎天下で学芸員が地面を掘っている様子や展示された本物の障壁画などをご覧になったお客さまもいらっしゃるかと思います。

さて、例年そのような「現場を担う学芸員たち」が執筆する本稿ですが、今回は趣向を変えて、普段皆さまが目に見えない「名古屋城調査研究センターの裏方仕事」の一部を、事務方である調査研究係長としてご紹介したいと思います。

所属学芸員の本務が「名古屋城を文化財として守り活用していく」ことだとすれば、センター事務方の本務は「文化財を守り活用していく『体制を作ること』」です。

とすると、体制とは何かという話ですが、その重要な2つの要素が、「人員」と「予算」です。本センターは職員数22名、年間予算は約1200万円(調査研究事務費)と、研究施設としては一見、大所帯に感じますが、大都市名古屋の巨大城郭・名古屋城を調査・研究していくには、これでも人手不足です。

そして、本センターは名古屋市という大きな組織の一部なので、人員や予算を確保するのも、他の部署との競争下に置かれています。

コロナ対策や子育て施策、インフラの維持…、名古屋市は皆さまの生活に直結するたくさんの施策を行っています。それと並んで「名古屋城の文化財を守り活用していく」施策の必要性、そのため的人员と予算が必要不可欠だ、ということをも

名古屋市長以下、幹部職員たちに認めてもらう必要があります。

このとき、文化財の大切さが伝わりやすいのですが、普段文化財に接していない事務方にはなかなか伝わりません。そこで、学芸員の考えを汲み取りながら、人員・予算部門とひざを突き合わせた議論をし、文化財を守る体制を確保していくことこそ、センターの事務方に与えられた職務となります。

他にも、数多くなされる契約書面のチェックや市議会対応など、幅広い業務を担っており、「センターの何でも屋」な面もあります。

これら事務方の仕事は普段、直接市民の皆さまの目に触れるものではありませんが、獲得した予算や措置出来た人員の活躍により、皆さまに名古屋城をより楽しんでいただけることを願って、職務に励んでいます。

名古屋城はこれからも、一丸となって文化財業務に磨きをかけていきます。ぜひ引き続き、ご声援賜りますよう、よろしく申し上げます。

(係長 小村拓也)



▲発掘調査現地説明会の様子

発掘された名古屋城

特別史跡 名古屋城では毎年、城内の至るところで発掘調査が行われています。そのため、ご来城の際には一部立ち入り禁止の場所があったり、ショベルカーなどの工事車両があったり、ヘルメット姿の作業員が、暑い日も寒い日も、地面を掘り進めていたり、スコープのような機械をのぞき込んでいる様子をみかけられたことがあるのではないのでしょうか。

名古屋城調査研究センターでは学芸員が中心となって、そのような発掘調査を担っています。地面の中には、建物やお庭、石垣など江戸時代の名古屋城の痕跡が、まるでタイムカプセルのように今でも残っています。それらについてひとつひとつ、丁寧に情報を収集しながらつまびらかにし、調査成果として記録保存をし、埋め戻します。こうして得られたデータが、これからの名古屋城の整備に活用されていくのです。

発掘調査は、「現地説明会」を題して、発掘調査されたそのままの様子を直接お見せするイベントを行うことがあります。しかし安全管理上、現地説明会を実施できない調査もあります。そこで本号では、令和4年度に城内で実施された発掘調査について、各調査の担当者による解説を交えて紹介します。江戸時代の名古屋城にぜひ想いを馳せてみてください。

天守台

天守内部における遺構の有無を確認するため、大天守、小天守の地階で発掘調査を行いました。屋内での調査ということで周囲が薄暗く粉塵が舞う悪環境でしたが、電気が通っているため、砂を取り払って遺構を見つける作業では掃除機が大活躍しました。



▲掃除機を使った遺構検出

今年度の調査では現代に積み替えられた石垣の下から江戸時代に作られたと思われる石列の延長が検出されました。石垣の一番下にあたる石材(根石)と考えられますが、今後調査成果を精査し、その性格を検討していきます。

(学芸員 二橋慶太郎)

調査期間▶令和4年(2022)7月20日～

※断続的に作業が行われており、埋戻しは次年度の予定。

搦手境門

お城には表側と裏側があり、表側を大手、裏側を搦手と呼びます。そして名古屋城本丸の大手と搦手の出入り口には馬出という防御施設がありました。搦手馬出では石垣の修理を行っており、整備に伴い発掘調査を行いました。調査地点は境門と呼ばれる門周辺です。

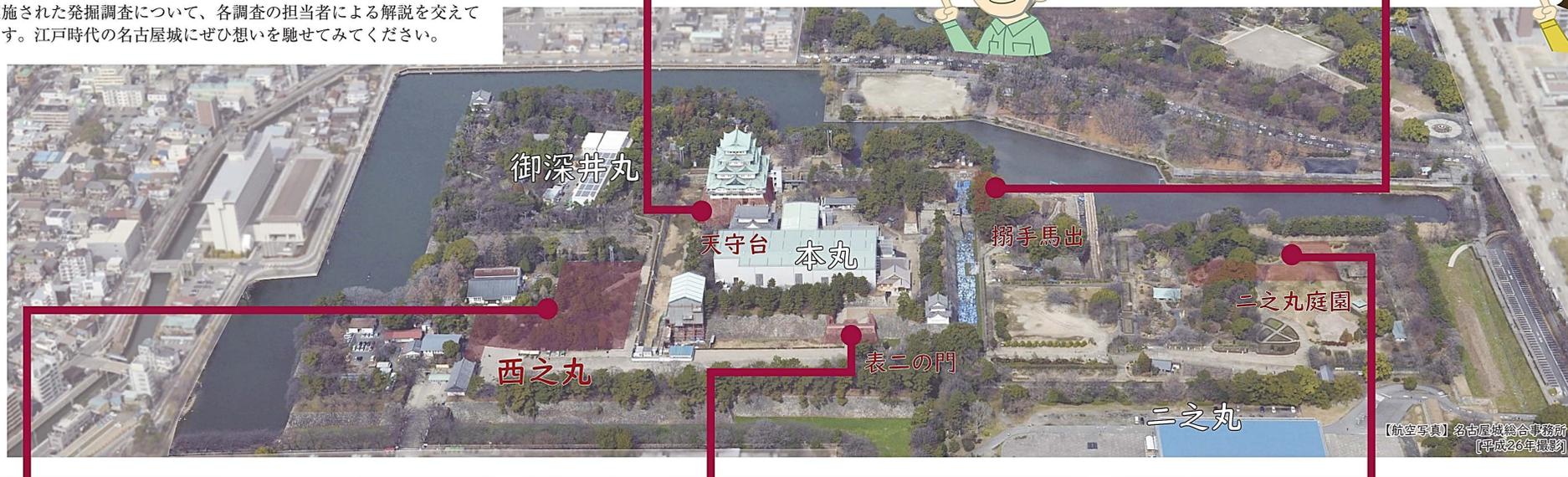


▲発掘調査風景(土層検出)

近代の暗渠等を確認しましたが、残念ながら門の痕跡は確認できませんでした。しかし巨大な瓦溜まりを確認しました。門の柱穴を利用した土坑かもしれない。発掘調査成果と絵図等を参考にしながら、整備の計画を進めていきます。

(学芸員 西本栄由)

調査期間▶令和4年(2022)8月24日～9月29日



【航空写真】名古屋城総合事務所 [平成26年撮影]

西之丸

江戸時代の西之丸に建てられていた六棟の米蔵のうち、一番御蔵、二番御蔵、五番御蔵、六番御蔵の位置等を確認するため発掘調査を実施しました。調査面積は1,000㎡を超え、近年の名古屋城では最も規模の大きな発掘調査になりました。



▲六番御蔵の礎石と地覆石

六番御蔵の調査では、建物の礎石や地覆石等の痕跡を確認し、蔵の位置や基礎部分の構造など詳細なデータを得ることができました。今後はこうした調査成果を活かして、米蔵の整備を進めてまいります。

(学芸員 酒井将史)

調査期間▶令和4年(2022)2月14日～8月31日

表二の門

重要文化財名古屋城表二の門は経年劣化が進行しており、大規模修理工事を計画しています。門の両脇にある土塀の背面には、かつて雁木(石段)があったとされ、修理工事に先立って雁木の痕跡が残されているのかを確認する発掘調査を行いました。



▲表二の門発掘調査風景

土層の急斜面に這いつくばりながらの発掘調査となりましたが、雁木の最下段と思われる切石が横一列に並んで出土しました。こうした成果をもとに今後も修理工事に向けて調査を続けていきます。

(学芸員 大村陸)

調査期間▶令和4年(2022)8月22日～9月22日

二之丸庭園

二之丸庭園の調査は、今回で10回目となります。本調査では、北園池や庭園の東部などおよそ600㎡の範囲で、江戸時代の残存遺構の確認を行いました。すると、門の礎石や溝跡、池跡、水琴窟など庭園に関連する遺構が多く残っていることが判明しました。これらの調査成果は、二之丸庭園の整備の貴重なデータとなります。



▲池跡の検出作業

(学芸員 村上慶介)

調査期間▶令和4年(2022)9月26日～
令和5年(2023)3月20日